

## 祝福を受けよ

(テサロニケの信徒への手紙 1 5章 16～22節)

神学校に入って新約聖書神学の講義を受け始めた時、とくに緒論といって、新約聖書全体の構成や、主だった文書の手ほどきを受けるのですが、時間の関係もあってそこまで丁寧に見ることは出来ずに、あとは自分で勉強して下さいみたいな感じになります。書簡もそこでざっと扱った記憶がありますが、パウロの書簡であれば、やはり新約聖書屈指の神学文書とよばれ、すべての聖書への扉を開くと言われるローマの信徒への手紙や、教会の実情に迫って信徒の生活を説き明かしてゆくコリントの信徒への手紙など、やはり大物がメインで、テサロニケの信徒への手紙は、パウロが最初に書いた手紙ということ以外には記憶に残っていませんでした。しかし今回、この書簡を取り上げて、しかもコロナの時期に最後まで皆さんと一緒に手紙に耳を傾けてゆく中で、パウロ自身も 27 節に「この手紙をすべての兄弟たちに読んで聞かせるように、わたしは主によって強く命じます」とあるのを読みまして、やはり、教会の出来事というのはプライベートなものではない。「わたくし」の出来事として閉じられているのではなく、神さまの救いを明らかにする出来事としてすべての人に対して開かれている、公共性を持っていて、分かち合われるもの。読み聞かせ、説き明かし、みながアーメンと唱和し、賛美する場を、神さまが求めておられる。そのことをパウロもよくよく承知していたことを改めてかみしめました。今日で、この手紙を終えますので、すこしまとめておきたいのですが、パウロが最初に教会にあてて書いたテサロニケの信徒への手紙は、後に続く聖書ならではの手紙のひな型となっています。個人が集団に向けて書く手紙は他にもあったで

しょう。しかしテサロニケの信徒への手紙はそうした手紙とは違います。福音を宣べ伝え、神の共同体を、教会を立ち上げてゆくための手紙という特別な使命、そういうスタイルが、ここから生まれていったのです。結局、それはラブレターです。愛の手紙になっている。愛は互いを結び付ける力を持っているからです。なかには怒っているような手紙もありますが、それとて相手を大切に思うからこそその怒りです。愛の反対は無関心です。それはありえないことです。とにかく込められている熱量がすごい。パウロは、神さまの代筆をしているような気持ちで、神さまに祈りながら、感謝しながら、彼らのことを思い起こしながら、様々な出来事の意味を、信仰において捉えなおして、主イエス・キリストの御顔の光の中において捉えなおして、恵みによって生かされている彼らの在りようを書きつけている。神さまの願っておられることを明らかにし、そこに沿って歩んでいくよう聖霊の助けを祈りつつ、励ましている。そこから彼らに、福音にもとづく生活改善や、気持ちの切り替え、共同生活への勧めを行っている。その頂点に来るのが「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」という勧めです。わたしはこれを花嫁衣裳の冠のような勧めと前回申し上げましたが、キリストを着せられて、神さまの前に、父よ、と進み出ることの許されたわたしたちが、最後にベールにつける飾りのような教えですね。この手紙は、人間パウロが、ある集団に宛てて書いた手紙なら、決してこんな勧めは書けない性質のものであります。いつも、絶えず、どんなことにも、と、全天候対応型の、いっさいの留保なしの、弁解なしの、まったき教えは、すべての創造主であり、裁き主であり、歴史の完成者である神さまの助けと導きなしには出来ない勧めだからです。主イエス・キリストによって罪赦され、

子とされているあなたがただからこそ、神の赦しの愛のもとで、聖霊によって導きを受けて生かされているあなたたちだからこそ、パウロはこのように書くことが出来ている。人間業ではなくて、神業、神さまの御手の中に生きる者たちの働き、愛と信仰の働きについてだから、このように書くことが出来ている。これが聖書の書簡の特徴ですね。この手紙は神さまの意向をくんだパウロがテサロニケの信徒たちに書いているラブレターなのです。

今回、ちょうどある出来事が重なって、わたしはこの個所をさらに意義深く捉えなおすことが許されました。それは先週、東京神学大学学長で旧約学の教授であった大住雄一先生が召されてちょうど一年で、ご遺族にお花を贈ろうということがかつての同級生が久しぶりに連絡をメールで取り合ったのです。懐かしい話題も出て、大住先生のことを思い起こしました。わたくしはテサロニケの信徒への手紙の結びの部分はずっと反すうしていましたので、それがきっかけで大住先生の「最後の言葉はイエスさまに取っておかなければいけない」という言葉を思い出しました。授業中に何げなく話された言葉ですが、印象深く記憶にとどめています。何度かお話していますので教会員の方もこの言葉を覚えておいでの方もいると思います。この手紙の結びの個所を読んでいて、大住先生の声がよみがえりました。パウロが手紙の最後で書いていることは、神さまへの嘆願です。

「どうか平和の神ご自身が、あなたがたをまったく聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も、魂も、体も何一つ欠けた所のないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストが来られるとき、非の打ちどころのないものとしてくださいますように。」このように始まる神への願いです。つまり、パウロはここまでテサロニケの信徒たちに様々な勧めをしてきましたが、それは人間の業であり、彼ら自身では完結し

ないのです。かならず神さまとの交わりの中で、最初と最後の言葉をもっておられる神さまとの関わりの中で勧められる教えなのです。最後の言葉は神さまが語られる。逆に言えば、わたしたちは教えに従って、働きをなして、最後は神さまに委ねることが許されているということです。聖霊を満たしてくださいとパウロはまた祈っていますね。人間の働きですべてが幕を閉じるのであれば、わたしたちには失望や絶望しかありません。しかし、このパウロの手紙の締めくくりは、ことがらが人間の次元では決して終わらないこと、終えてはならないことを、テサロニケの信徒たちに、またわたしたちに教えているのです。この最後の「どうか平和の神ご自身が、あなたがたをまったく聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も、魂も、体も何一つ欠けた所のないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストが来られるとき、非の打ちどころのないものとしてくださいますように。あなたがたをお招きになった方は真実で、必ずその通りにしてくださいます」という願い求めは、皆さん、教会堂以外のどこかで聞き覚えがありませんか。この個所は、実は葬儀の時に、それも火葬にする直前に、斎場で牧師が宣べ伝える最後の言葉なのです。親しい方を送られた方は聞き覚えがあるのではないのでしょうか。「どうか平和の神ご自身が、あなたがたをまったく聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も、魂も、体も何一つ欠けた所のないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストが来られるとき、非の打ちどころのないものとしてくださいますように。」この願いは、キリスト者の死は、すべての終わりではないことを明らかにしています。最後の言葉を語られるのはここでもわたしたちではありません。主なのです。そしてこれは、この手紙の中でテサロニケの信徒たちが一番訊きたかったこと、主が再び来られる前に召されてしまったわたしたちの兄弟姉妹

はどうなるのか、という問いかけに応えた手紙でいうと 4 章 13 節以降の問いかけをパウロがきちんと覚えていて、最後にもう一度、あなたがたの希望は、あなたがたを招かれた平和の神ご自身にあるのだということを嘆願のかたちで語り伝えているのです。信徒たちに向かって語った教えを、今度は、パウロは神に顔を向けて、彼らと共に、どうかあなたの信徒たちをお守りください、ととりなしの祈りをしている。わたしたちの助けは天地を創られた主の御名にあり、平和の神ご自身、あなたがたを、この福音に招き入れて下さった方ご自身の誠実さが、あなたがたを守るのであり、そこに希望があるということを教えているのです。重要なことです。最後の言葉は神さまに取っておかなければならないとは、こういうことです。そして、最後に、パウロは、わたしたちのためにも祈ってくださいと願うのです。これも大切なことです。一方的に教え、与える関係ではないのです。互いの祈りが必要なのです。牧会者ほど祈られることが必要な存在はありません。教会員に祈られない牧師は惨めなものです。風が吹かなければ空を舞えない凧のように、祈りの風に送り出されなければ、とりなしの働きをなすことは難しいのです。このようにパウロの最初の手紙は、わたしたちの希望が常に神にあることを指し示し、この方と、子なるキリストからの恵みによって生かされることが、主に召された者たちの幸いであることを喜びと感謝をもって証するのです。この消息に、わたしたちも生かされたく願います。

お祈りいたします。